メッセージ　4

神の民は主の導きを求め、主の臨在を持ち、主の勝利を展覧して彼のからだを建造し、彼の王国を拡大する必要がある

聖書：マタイ1:5．ヨシュア6:22-26．7:1-6，10-15，20-21．9:14

Ⅰ．二人の斥候がエリコに来たとき、ラハブ（遊女でありカナン人であった）は、彼らと接触し、彼女の信仰から出た行動によって進んで彼らを受け入れ、彼らを隠し、彼らを解き放ちました（ヨシュア2:1後半-7，15-16，22．ヤコブ2:25）。ラハブはイスラエルの神を信じ、宣言しました、「エホバ・あなたがたの神、彼こそは、上は天にあっても下は地にあっても神であられる」（ヨシュア2:11後半）：

Ａ．エホバは地を得るために遊女ラハブをヨシュアに備えました。彼女は神にある信仰のゆえに、「不従順な者たちと共に滅びませんでした」（ヘブル11:31）。ラハブはイスラエルと彼らの神に転向し、神と神の民に信頼しました（ヨシュア2:12-13）。

Ｂ．ラハブと彼女の家族が救われることのしるしは、彼女が彼女の家の窓に赤い糸のひもを結んだことでした（ヨシュア2:18，21）。赤い糸のひもを窓に結ぶことは、キリストの贖う血を公に告白することを予表します（Ⅰペテロ1:18-19）。ラハブはこのしるしによって、彼女と彼女の家族が救い出されると信じました。

Ｃ．ラハブは罪定めされたカナン人であり、神によって永遠にのろわれた場所である（ヨシュア6:26）エリコの遊女でしたが（2:1）、神と神の民に転向した後（6:22-25．ヘブル11:30-31）、サルモンと結婚しました（マタイ1:5）。サルモンは、イスラエルの指導的な部族であるユダのリーダーの子であり（歴代上2:10-11）、またおそらく二人の斥候の一人であったでしょう。それから彼女は敬虔な人であるボアズを生み、ボアズからキリストが出て来ました。そして彼女は肉体と成ることにおけるキリストに結び付けられました。それは神の永遠のエコノミーを完成するためでした（マタイ1:5）。

Ｄ．このことが示しているのは、わたしたちの背景にかかわらず、もしわたしたちが神と神の民に転向し、（物質的な意味でなく、霊的な意味において）神の民の間の正しい人に結合されるなら、わたしたちは正しい実を生み出し、キリストの長子の権を享受することにあずかるということです――出24:13．33:11．民27:18．申34:9．ヨシュア1:1．列王下2:2-15．ピリピ2:19-23．Ⅰコリント4:17。

Ⅱ．エリコの破壊の後、イスラエルはアイで打ち破られました。エリコでは、神のエコノミーにしたがって、ヨシュアは斥候を遣わしました。それは戦うためではなく、ラハブを得るためでした。しかしアイでは、イスラエルは主の臨在を失っていたので（ヨシュア7:12後）、ヨシュアは戦うために斥候を遣わしました（2-3節）：

Ａ．ヨシュアに対する斥候たちのアイに関する報告は、イスラエルが神をわきに置いていたことを示します。彼らはアイに対して何を行なうべきかを神に尋ねるのではなく、神を忘れ、ただ自分自身を顧慮するだけでした。その時、彼らは神と一ではなく、自分で行動し、主の導きを求め、主の臨在がありませんでした。イスラエルは彼らの罪のゆえに、神から分離されました――ヨシュア7:1-5，12後：

１．イスラエルのアイに対する敗北のかぎは、彼らが神の臨在を失い、もはや神と一

でないことでした。この敗北の後、ヨシュアは契約の箱の前で主と共にとどまるという学課を学びました（6節）。最終的に、主は入って来て彼に語り、行なうべきことを彼に告げました（10-15節）。

２．この記録から学ぶべき霊的な学課は、わたしたち神の民が、わたしたちの神と常に一となるべきであるということです。彼はわたしたちの間にいるだけでなく、わたしたちの中にもいて、わたしたちを神を持つ人、すなわち神・人とします。

３．わたしたちは神・人として、主と一であり、彼と共に歩み、彼と共に生き、彼と共に存在することを実行すべきです。これがクリスチャンとして歩み、神の子供として戦い、キリストのからだを建造する道です。

４．わたしたちは主の臨在を持つなら、知恵、洞察力、先見性、事物に対する内なる認識を持ちます。主の臨在はわたしたちにとってすべてです――Ⅱコリント2:10. 4:6-7. ガラテヤ5:25. 創5:22-24. ヘブル11:5-6。

Ｂ．わたしたちは良き地の実際としてのすべてを含むキリストに入り、所有し、享受しようとするなら、主の臨在によってそのようにしなければなりません。主はモーセに約束しました、「わたしの臨在があなたと共に行って、わたしはあなたに安息を与える」（出33:14）。神の臨在は神の道、すなわち「地図」であって、神の民に彼らが歩むべき道を示します：

１．わたしたちは神の建造のためにすべてを含む地としてのキリストを完全に獲得し、所有するために、この原則を保持しなければなりません。その原則とは、神の臨在があらゆる事柄に対する基準であるということです。わたしたちは何をするかにかかわらず、わたしたちが神の臨在を持っているかどうかに注意を払わなければなりません。わたしたちが神の臨在を持っているなら、すべてがありますが、わたしたちが神の臨在を失うなら、すべてを失います――マタイ1:23. Ⅱテモテ4:22. ガラテヤ6:18. 詩27:4, 8. 51:11. Ⅱコリント2:10. エゼキエル48:35。

２．主の臨在、主の笑顔が支配する原則です。わたしたちは主の間接的な臨在によってではなく、直接の、直の臨在によって守られ、支配され、管理され、導かれることを学ばなければなりません。彼の尊い臨在は、わたしたちが乳と蜜の流れる良き地の実際としてのすべてを含むキリストを所有するための力です――出3:8. 25:30. 申26:9. エゼキエル20:6。

３．「わたしは若いとき、打ち勝ち、勝利を得て、聖となり、霊的になるさまざまな方法を教えられました。しかしながら、これらの方法はどれも役に立ちませんでした。最終的に、わたしは六十八年以上の経験を通して、主の臨在以外に何も役に立たないことを見いだしました。彼がわたしたちと共におられることがすべてです」――ヨシュア記ライフスタディ、第8編。

Ｃ．イスラエル人がカナンの地へと入り、エリコに対して勝利を得たとき、罪を犯した最初の人はアカンでした。アカンの重大な罪についての、内在的で、霊的な意義と神聖な見方は、彼がバビロンの美しい外套（シナルは後にバビロンと呼ばれた地域です）をむさぼって自分自身を改善することを追い求め、外見をより良く見せようとすることでした――ヨシュア7:21：

１．聖霊に対して偽ったアナニヤとサッピラは、同じ原則の罪を犯しました。これが

バビロン、すなわち偽善の原則です――使徒5:1-11．啓17:4，6．マタイ23:13-36：

ａ．彼らはあまり主を愛していませんでしたが、大いに主を愛した者のように見られたかったのです。彼らは装っていたにすぎませんでした。神の子供たちは人前で装うことから救い出される必要があります。

ｂ．彼らは神にすべてのものを快くささげようとしなかったのに、自分たちがすべてのものをささげたかのように人前で行動しました。わたしたちは、自分の実際の状態に符合しない衣服を着て、人からの栄光を受けるときはいつも、バビロンの原則の中にいます――マタイ6:1-6．15:7-8。

２．人から栄光を受けるために虚偽の中で行なわれたすべての事は、遊女の原則において行なわれるのであって、花嫁の原則において行なわれるのではありません。偽りの献身は罪です。偽りの霊性も罪です。真の礼拝は、霊と真実の中にあります。どうか神がわたしたちを真実な人とならせてくださいますように――啓17:4-5．19:7-9．ルカ12:1．Ⅰコリント2:9-10．Ⅱコリント2:10．5:14-15．ヨハネ4:23-24。

３．「人がどのように見るかではない．人は上辺を見るが、エホバは心を見られるからだ」（サムエル上16:7）。わたしたちが心に神の言葉を蓄え（詩119:11）、キリストにわたしたちの心の中にご自身のホームを造っていただくなら（エペソ3:16-17）、彼はわたしたちの心の良い宝となります。そしてわたしたちの心にあふれ出たものから、わたしたちはこのすばらしい、良い宝としての彼を、他の人たちの中へと分与することができます（ルカ6:44-45）。

Ⅲ．イスラエルは彼らの罪、アカンの罪を対処した後（ヨシュア7:11-12，20-21）、アイに対して勝利を得ましたが（8:1-35）、それからどのようにしてイスラエルの子たちがギベオン人によって欺かれたかについての記録があります（9:1-27）：

Ａ．ギベオン人はヒビ人であり（ヨシュア9:3，7．11:18-19）、イスラエルによって消滅させられなければならなかったカナンの地の諸国民の一つでした。なぜなら、彼らは悪魔的で、悪鬼どもとミングリングされていたからです（申7:2．9:4-5．18:9-14）。ギベオンの住民は、彼らのこうかつさをもってイスラエルを欺きました（ヨシュア9:3-14）。

Ｂ．彼らはイスラエルがエリコとアイを打ち破ったことを聞いていたので、イスラエルと和を講じて契約を結びたかったのです。それはイスラエルが彼らを生かすためでした。彼らは使者であるかのようにして出て行き、遠くから来たふりをしました。彼らはギルガルの営所にいるヨシュアの所へ行って、彼とイスラエルの人々に次のように言いました、「わたしたちは遠い地からまいりました．……わたしたちはあなたがたのしもべになります．ですから、わたしたちと契約を結んでください」（ヨシュア9:6，11）。

Ｃ．ヨシュア記第9章14節は、聖書の非常に強力な箇所であり、なぜイスラエルの子たちがギベオン人によって欺かれたのかを示しています――「彼ら［は］……エホバの助言を求めなかった」。こういうわけで、ヨシュアは和を講じ、彼らと契約を結んで彼らを生かしておいたのです（15節）：

1．イスラエルの子たちがギベオン人に欺かれたのは、彼らが夫を忘れた妻のようであったからです。全聖書は神聖なロマンスであり、どのように神が彼の選びの民に求愛し、最終的に彼らと結婚するかについての記録です（創2:21-24．雅1:2-4．イザヤ54:5．62:5．エレミヤ2:2．3:1，14．31:32．エゼキエル16:8．23:5．ホセア2:7，19．マタイ9:15．ヨハネ3:29．Ⅱコリント11:2．エペソ5:25-32．啓19:7．21:2，9-10．22:17前半）。

2．聖書が見せているのは、わたしたちが神の選びの民として彼の妻であるということ、また彼とわたしたちとの間に相互の愛に基づいた結婚の結合があるということです。ですから、宇宙は婚宴の場所であり、手順を経て究極的に完成された三一の神である夫が、贖われ、再生され、聖別され、造り変えられ、栄光化された三部分から成る人に、結婚において結合されつつある場所です。最終的に、聖書は新天新地における神の選びの民の究極的完成としての、永遠にわたる宇宙的な妻としての新エルサレムで終わっています――啓21:9-10．22:17前半。

3．妻は決して自分の夫から離れるべきではありません。そうではなく、彼女は常に夫に依り頼み、彼と一であるべきです。ギベオン人がイスラエルの所に来たとき、妻としてのイスラエルは、夫の所に行き、何をすべきかについて彼に尋ねるべきでした――ヨシュア9:14。

4．主を愛し、彼の勝利を得る花嫁の構成要素となることを渇望する信者として、わたしたちは自分が遭遇するあらゆる問題に関して神に相談すべきです。わたしたちはあらゆる事柄を主にもたらし、彼の御前で、また彼との交わりの中で、事を考察し、調べ、決定する必要があります：

ａ．この面で、あらゆる信者が必要とするのは、自分が遭遇することに関して主と接触し、主に相談し、主に決定していただくことなしに、自分自身の考えを持たず、自分自身の決定をせず、いかなる行動も取らないという程度にまで弱くなることです。これが最も甘いクリスチャン生活です――Ⅱコリント12:9-10。

ｂ．わたしたちには別の選択肢はなく、ただすべての事において神と交わり、彼とすべての事を話し合い、彼にすべての事を取り扱っていただき、すべての事で語っていただき、あらゆる決定をしていただくだけです。クリスチャンがあらゆる時に、あらゆる事において、別の方（神）に依り頼むことは栄光です――ピリピ4:6-7．箴3:5-6．エレミヤ17:7-8．Ⅱコリント1:8-9．詩62:8．詩第102篇、主題と7節。

5．神は、あなたが知らない道にあなたを導くなら、「あなたに強いて彼と何百回、何千回もの会話を持たせ、あなたと彼との間の永遠の記念となる旅をさせる結果になるでしょう」――ウオッチマン・ニー全集、第7巻、334ページ。

6．イスラエルが彼女の夫の助言を求めなかった結果、この独立した、個人主義的な妻は欺かれ、彼女には保護がなく、保障もありませんでした。聖書のこの記録から、わたしたちは主の妻として、彼と共に生き、常に彼に依り頼み、いつも彼と一であることを学ぶ必要があります。これがヨシュア記第9章の内在的な意義です。

© 2021 Living Stream Ministry